サンパウロ総合大学の日本語・日本文化研究

ジェニー・ワキサカ（サンパウロ総合大学）

サンパウロ総合大学における日本語講座とその文化研究所についてお話しいたします。

サンパウロ総合大学哲学・文学・人文科学部の学長、エウ・リピデス・シモンエス・デ・パウラ教授の発案により、1963年、歴史学部に東洋語講座が開講され、アラビア語・アルメニア語・ヘブライ語・ロシア語・サンスクリット語・中国語とともに、日本語講座も開設の運びとなりました。教官としては、最初東京外国語大学交換講師二名が派遣され、また日本側から海外技術協力事業団の援助を受けました。1967年、同学長の要請により、サンパウロ大学法学部社会学部卒業の鈴木悌一氏が、講座の主任教授として着任されましたが、同時に東洋語講座が歴史学部より文学部へ移されて、東洋語学科となり、その一講座として、日本語日本文学講座が再発足します。

1968年、日本文化研究所が、サンパウロ大学東洋学科付属研究所として開設されます。72年より、日本側の援助がOTCAから国際交流基金へと徐々に移管され、76年には、日本政府より一億五千万円、そのほか経団連、万博資金など、あるいは現地の資金が加算されまして、日本文化会館が大学当局無償貸与の構内敷地約3000平方メートルに完成します。日本文化研究所は、その一階と二階の無料使用権を得て、転居します。当文化会館の運営は、以後、日系人社会の機関である日伯文化連盟に依託されましたが、日本文化研究所の研究費用、図書館整備運営費などは、

引き続き国際交流基金の援助を受けて、今日に至っております。1981年、鈴木悌一所長定年退官、玉井乾介国際交流基金派遣教授が所長として着任され、83年に日本語学科大学院講座開講の計画が決まります。その大学院開設にあたり、84年より講座の教官が三名博士号取得をいたしております。

サンパウロ大学には、この日本文化研究所と日本語講座と二つの機関がありますが、今日は主として研究所のほうの紹介をいたしたいと思います。

日本文化研究所の運営審議会は、1982年大学で承認された内規により、所長一名、副所長一名、常任委員としてサンパウロ大学東洋学科日本語日本文学講座教官、講座外東洋学科教官二名、講座学生代表一名及び顧問役として前所長二名という構成になっています。日本語日本文学講座へは、1969年より海外技術協力事業団からの援助、1975年以降は国際交流基金からの援助により、毎年平均二名の客員教授を派遣していただいております。89年の二名を加えますと、現在までに22名の客員教授を迎えていることになります。

日本からの客員教授は、講座の高学年への古典文法と古典文学の授業を受け持つことと、研究所において講座の卒業生及び研究員を対象とした大学院並の特別講座での講義のほか、常任研究員の個人指導を行っています。また、教材作成などのアドバイザーもお願いいたしております。なお、毎年二学期に、日文研（国際日本文化研究センターの略称も日文研ですが私どもも東洋学科付属の日本文化研究所も日文研と呼んでおります）主催で開かれます講演会で、各専門のテーマによる講演をやっていただいております。

サンパウロの日文研では、日本語、日本文学、日本文化一般について

のブラジル人の研究者養成を日本語を通して行うことに力を尽くしており、このため、日本語講座の優秀な学生を抜擢し、特訓、集中講義などを行っています。現在、その意図のもとに、三名の奨学生が勉学に励んでおります。この奨学生やその他の研究者おのおのの研究テーマは、日本史ではキリシタン伝来の頃の研究、構文論、古典韻文学、日本語ポルトガル語の比較対照研究、日本語の意味論と陳述論、14〜15世紀の日本におけるキリシタン文献・中世説話文学・版画史・能・狂言、社会言語学では、日本語の敬語法などの研究を進めております。

発足当時、研究所の活動は、日本語講座の教材づくりに励み、客員教授の人選にも国語学専門の方の来所を希望し、日本語研究に絞られておりましたが、ポルトガル語との対照比較によって考案された文法書も、一応完成の見通しがつきましたから、客員教授派遣も、日本文学分野のほうを要請するようになり、研究者も日本史・美術史・芸術関係へと指向する者が現れ、多岐にわたる本格的な日本文化研究所の様相を整え始めました。なお、日本語を通してなされる日本研究と、日本の古典的文化偉業の研究に重点を置く姿勢は、今後とも保たれていく見通しであります。

研究所の課外講座としては、サンパウロ大学の学生を対象に、茶道・華道の講座も週一回ずつ開講しております。わずか二学期で修了し、大学より修業証書が出されておりますが、学生は非日系人がその大部分を占め、一クラス20名ほどの定員ですが、希望者がそれを上回る現状です。茶道の指導は、裏千家寄贈の日文研茶室で、1979年より裏千家林宗慶師匠がそれにあたり、1977〜78年には続けて日本へ茶道留学をした学生も、何人か出ております。生け花講座は、1982年より池坊の講師がそれにあたり、実技だけでなく、その歴史・理論の講義がなされます。サンパウ

ロ生け花協会の協力のもとに、運営いたしております。茶道講座では、デモンストレーションのあるたびに、学生も参加し、生け花講座では、年末の学生の習作展を催しております。

刊行物として、年間の研究発表の機関誌として日文研の論文をまとめ、エスツドス・ジャポネーゼス（ESTUDOS JAPONESES）を国際交流基金の援助を得て発行しております。1979年に第一号を出し、89年に九号が近く出版されます。また、10年来研究を重ねてきました講座第一学年使用の基本文型集、単文複文を含む教材もできましたし、1989年には、基本文法書、日葡対照比較による考案に、何回かの訂正が加えられ、最後の校正も終了し、近く、発行の運びとなります。現在、これに続く第二学年使用予定の日本語教材と、日本近代文学史の教材づくりを進めております。

このほか、文化教養番組あるいは文学作品、映画などの鑑賞会なども常時催しております。1987年には、国際交流基金の新日本映画祭に便乗し、大学生一般のために何本かの日本映画を上映いたしました。

88年には、ブラジル日本移民八十年の記念祭が行われましたので、所員もこれにいろいろと引っ張り出されて、新聞・ラジオ・テレビに研究所の紹介のほか、日本文学・日本文化一般に関する紹介の要請に応じて、多忙な一年でした。当研究所主催の催しとしましては、井狩章教授、江口正弘教授の講演会も催しました。演題は「近代日本文学思潮」と「天草版平家物語について、キリスト教伝来とその頃の言葉」というものでした。

次に図書館ですが、1968年より、日本語・日本文学・日本文化一般の研究に携わる研究者のために、その図書館整備に尽くしてまいりました。このために、図書の寄贈を通して、ご協力いただきました機関名は、次

のとおりです。68年より外務省海外技術協力事業団・国際交流基金・ペンクラブ・自転車協会・玉川学園・万国博協会・創文社・サンパウロビエナル書籍・サンパウロ青年商工会議所などの寄贈を得て、現在、単行本が19,348冊、その内辞書・辞典などが495タイトル、全集・講座が514タイトル、目録が79、単行本の分類パーセンテージは総記が6％、哲学・宗教が9％、歴史が17％、社会科学が10％、自然科学・工学・産業が2％、芸術が10％、言語が9％、文学が37％、を占めております。そのほか専門雑誌、和文のものが79種、洋文のものが、延べ34種あります。概算しますと約24,700ほどの冊数です。研究者の要望にこたえて、この分野を広げていく計画です。

研究所の紹介は以上で終わりとします。

なお、サンパウロ大学文学部東洋学科日本語日本文学講座について付記しますと、講座は基本コースと選択コースの二部にわけてあります。

選択コースは、ランゲージ・ラボを使用して会話に重点をおき、午前の部と夜間の部にそれぞれ週四時限の授業が行われ、一年制のコースで、基本コースに入学の学生を優先にとりますが、空席のあり次第、当大学学生の希望者も受けつける仕組みとなっています。

基本コースは四年制二部（午前と午後）に分かれ、週六時限（一時限50分）で構成されています。明年度から第二学年と第三学年が八時限となる予定です。基本コースのカリキュラムは現代語文法、古典文法、現代及び古典文学作品の原文を通しての読解とその分析、更に文化史の授業で、歴史的にみた日本の政治、社会、経済と文化偉業の探求、検討が行われます。

この広汎な資料とその最小限の時間帯に対応するために講座では上記の知識情報修得に肝要な技術と研究法の供給にたずさわるよう努めてい

ます。

（1989年3月）